

看護に活用するレジリエンスの概念と研究

レジリエンスという概念が使用されるようになったのは、1970年代頃からである。心理学領域では、ストレスから生じるネガティブな側面に焦点を当てた研究が進められてきたが、人間には過酷な環境や状況のなかでも、それに負けず前向きに進んでいく力が存在する、つまりポジティブな側面にも目を向けようとする動きが、最近みられるようになってきた。レジリエンスへの注目も、その流れの一部ではないかと考えられる。

医療の現場では、さまざまな健康障害によって過大なストレスが生じ、苦悩する人々が多く存在する。しかし、そのような人々のなかには、ストレス状態に屈することなく、厳しい現実を受けとめ、自らの力で立ち直る強い意志と力をもつ人も決して少なくない。我々は、そのような人々について説明できる概念として、「レジリエンス」に注目し、2003(平成15)年より科学研究費補助金を得て研究を重ねてきた。

本焦点は、レジリエンスの看護における活用について探求するものである。この企画は、3つの内容から構成されている。第1は、心理学領域から発展してきたレジリエンスという概念の定義や研究の動向、さらに現在日本で市販されているレジリエンスの測定尺度の開発過程について論じる内容である。第2は、患者や家族のレジリエンスに焦点を当てた研究である。そして第3は、看護援助におけるレジリエンス支援に関する内容である。

レジリエンスについての看護領域での研究は、まだ緒についたばかりである。そこでまず、心理学での研究の現状から、レジリエンスという概念を概観してみる必要があると考えられた。看護領域での活用を考える視点では、2つの方向での研究を紹介した。その1つは、長期にわたる重篤な疾患により多大なストレス状態にある患者や家族が、その事態を乗り越える闘病過程において、どのようなレジリエンスを用いているのかを明らかにする研究である。ここでは、先天性心疾患をもつ思春期の子どものレジリエンス、在宅で中心静脈栄養法という高度の医療的ケアを実施している学童期の子どもとその親を対象とした研究を紹介する。次いで、看護実践における患者のレジリエンス支援についての研究である。レジリエンス支援は、新たな援助というより以前からすでに実践されているものと捉えているが、影響要因の分析は、看護職者による、より有効な精神的援助に結びつく上で必要であると考えている。

看護におけるレジリエンス研究は始まったばかりであるが、これを機会に仲間が増え、新たな対象における研究につながっていくことを期待する。

(企画：藤原千恵子 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻教授)